

ネガとポジの反転

— 寿の聞き取り調査から —

辻 山 ゆき子

1 問題の所在

本稿は、長年にわたって日本の三大寄せ場のひとつであった横浜市中区の寿で支援活動を行ってきたふたりの女性へのインタビューに基づいている。おふたりへのインタビューは2014年2月に行われた。これは断るまでもなく質的アプローチであるが、このような方法をとって何を明らかにしたいのかを述べておきたい。

社会心理学者のG・W・オルポートは『質的研究法』において、人間の精神が周囲に向ける関心・注意には二通りの様式があり、一つは経験を分類し、一般原理に迫ろうとする普遍化への心のはたらき、もう一つは、目の前の個別の事象や単一の出来事に関心が集中する個別化への心のはたらきであるという。この二つの知の形態を法則定立的 (nomothetic) なものと個性記述的 (idiographic) なものとして対置している。そして、インタビュー調査を含む個人的ドキュメントは、「人間精神の渴望する法則定立的な知も個性記述的な知もどちらも提供することができる資料なのである」と述べている (Allport 1942=2017: 97-9)。ただ、個人的ドキュメントが法則定立的な知を提供するためには、一定の多数のサンプルに基づいてはじめて、帰納的な方法で一般化を引き出すことが出来ると考えていた (Allport 1942=2017: 322)。本稿は、ふたつというわずかな事例を扱っているので、あくまでも個性記述的なものである。

川野英二 (2017) は、「社会学の調査研究方法では、量的アプローチと質的アプローチの対立、つまり質問紙をもちいたデータ収集と多変量解析を駆使する量的方法と、インタビュー調査によってえられたデータやフィールドワークから行為者を理解しようとする質的方法との対立は今なお根強い」と述べ、フランス社会学で社会調査がどのように実践されてきたか、質的調査がどのように評価されてきたのかという興味深い歴史をたどっている (川野 2017: 79)。フランスでは、アメリカのシカゴ学派のような個性記述的な質的調査が評価されてこなかった長い歴史の後、1970年代以降ライフヒストリー・リバイバルがあった。そして、質的アプローチが選択されるのは、研究対象が限定されていたり、予備的な知識のない場合であり、また、証言はたんに事実についての語りではなく、「アイデンティティの再構築の

道具」だという立場を紹介する。

本稿では、寿で長年にわたって支援活動をしてきた女性の世界観の一端に触れたいと考えている。対象は、非常に限られた人々であり、また予備的な知識をもつことが難しい。インタビューという個人的ドキュメントの分析こそが相応しい領域だろう。インタビューの際に気をつけたのは、一定の枠組みから質問することをせず、インタビューに協力いただいたS眞理子さん、M妃佐子さんの語ろうとしていることの暗黙の前提に注目することである。いわゆる非構造化インタビューであり、「なぜ寿に来たのか、寿がどのように変わったのか、どんな活動を大事にしているか、何を目指しているのか」を、臨機応変に伺った。分析においても外側から理論的枠組みを持ってくることはせず、語りが述べることをそのまま生かして読み取ろうとしている。語りが「アイデンティティの再構築の道具」であるのなら、外から理論で切り刻んでしまったら、その個性は失われてしまうだろう⁽¹⁾。

ふたつの聞き取りを本稿で一度に扱うのは、寿と日本社会の関係性の認識においておふたりに響きあうものがあるからである。共通点を見出し、比較することが可能であった。おふたりのように長年にわたって寿の支援活動を行っている女性は少ない⁽²⁾。S眞理子さんとM妃佐子さんの聞き取りの分析を通して、彼女たちが寿の支援活動の視点から寿と日本社会をどのように認識しているかを記述したい。

2 寿地区の聞き取り — ジェンダーの視点から —

2-1 S眞理子さんインタビュー

S眞理子さんは、寿地区自治会事務局長であるが、その他にもたくさんの役職に就いている。とても多忙な人だ。1952年生まれ。聞き取りは2014年2月22日に行った。その年、誕生日がくれば62歳。寿の中心に位置する寿生活館2階自治会事務室で朝9時45分にお会いした。12時にはある人にお弁当を届ける約束があるということだったが、寿の住民の立場から忙しい合間に長時間を割いてインタビューに応じてくださった⁽³⁾。

2-1-1 「結婚」で寿へ、そして寿で働いて

〔S〕 どうしてここ〔寿〕に来たかっていうのは、20歳の時に寿に住んでいる人と、いわゆる結婚をしました。それで寿で生活するようになりました。まあ、子どもが生まれて別れるんですけどね。ひとりで寿の中で子どもを育てました。今年62歳になります。ですから、寿は今年で42年になります。長いです。鹿兒島さん⁽⁴⁾より長いです。〔子どもが生まれたのが〕30歳の時ですから、今年〔子どもが〕32歳になります。〔離婚したのは〕子どもが生まれてすぐです。〔長い間、寿で〕ひとりで子どもを育てて。〔子どもは〕社会学をやりました、大学で。

それで縁があって、いちばん最初に寿の中にあった「ことぶき福祉作業所」、障がい者の作業所の職員になって、20数年仕事をしてきました。今はもう辞めました。1日中ボランティアです。どこからも収入を得ないでそのうち手持ちがなくなるから生活保護を受けようかと思っている最中です。〔ボランティアは〕5,6年経ちますね。蓄えがあるなしに関わらず、やっぱり仕事場で本業ができなくなってくる。本来は収入を得るところで一生懸命働かなきゃならないんだけど、それが地域とか、いちばんはポートピア^⑤の誘致でとても時間が取られてしまって、職場に迷惑をかけるので、自分から辞めたっていうのがひとつ。それは表向き。もうひとつは、私はいろんなところの会計をやっているんですけど、学童保育にしろ高齢者ふれあいホームにしろ、自治会にしろ、財源がないんですよ。でもお給料は払っていかなくちゃならない。市営住宅の共有経費も赤字だ。自分の貯金も費やしていたんだけど、なかなかそれができなくなって、次に狙ったのが自分の退職金。自分の貯金がなくなったら、次は自分の退職金だ。これはあまり表向きの話じゃないんですけど、まあ外国〔の人に話すの〕だったらいいかなと思っていま喋っているんです。本当のところは、お金がなかったんです。自分が関わっている会計、担当しているところのお金がなくなって。まあ仕事もちゃんとできていないし、つぎ込む貯金もないし、でも退職金があったので、作業所ですからわざわざかですけどね、唯一それが最後の財源だったわけです。

Sさんは、表向きに話だといいながら自分の関わってきた団体に自分の貯金をつぎ込み、最後は退職金もつぎ込んでいるという。Sさんは、とくに会計の資格は持っていない。「誰もやらなかったから、やってって言われちゃった」ので、寿の様々な団体の会計、事務の仕事を担当してきた。資格としては社会福祉主事任用資格を持っている。Sさんはインタビューの途中、担っている団体の数を見せるためにUSBの束を机の上に出してくれたが、全部で10本あった。「全部そう。これ全部。会計だけじゃなくて、本当に全部ですね。そう、事務屋」だという。このような生き方は、寿の支援のために経済と労力の点から、大きな自己犠牲を払ってきたといっただろう。

2-1-2 「女性って強いな」

寿の女性たちをどう思うかと聞かれて、何よりも女性の強さを強調する。

《S》私が来た頃は有子世帯がたくさんいて、当時も今も変わらないのは、とても女性が強いということ。男性の言う通りに生きている、男性についていくような女性は、たぶん寿の中ではいないんじゃないかっていうぐらい。たとえば、お父さんが日雇い労働をしています。お母さんが子どもを育てているかっていうと、お母さんも日雇い労働に出るとか。〔女性は〕強い。今は、子どもを育ててきた、日雇い労働をしてきた女性た

ちもずいぶん高齢化しています。また新たな女性たちが増えている。それはたとえば K さんにしろ、M さんにしろ自分の目的を持って寿で活動する女性たちですよ。訪問看護しろ何にしろ。活動を目的に〔寿に〕入る女性たちもいますけど、そうじゃない人たちも含めて、とっても女性って強いなと思います。

寿はその他の寄せ場とは少し異なり、日雇い労働者の家族形成もみられた。つまり、子どもも多かったのである。自ら日雇い労働に出ていたかつての寿のお母さんたちだけではなく、現在、支援活動のために寿に来た女性たち、さらには簡易宿泊所にひとり暮らしをしている女性たちも強いという。

かつては簡易宿泊所は女性を受け入れなかったのだが、近年は女性専用フロアを設ける宿もあり、簡易宿泊所で暮す女性たちもいる⁽⁶⁾。

《S》寿で生活せざるを得ない、簡易宿泊所で生活せざるを得ない人たちも今増えていきますけれども、いろんな苦労をされたり、傷ついたりした人がとても多いと思うんです。家族とも切れてね。昔は簡易宿泊所に女性はダメよと言われてたんですけども、今は入ってます。そういう人たちと親しくお話する機会はないんですけども、私が求めない人なので聞くことはないけど、でも強くなければこの男性ばかりの中できちんと生きていくことが〔できないと思う〕。できるっていうのは、強さを持っている人だと思うんです。もともと女性はどんな状況にあっても逆境に強い。女性って〔強さを〕もともと持っているのかなあと思います。男性よりはね。

簡易宿泊所の中では、トイレが共同じゃないですか。男女が分かれているわけじゃないので、そのために新しい簡易宿泊所なんかは女性フロアをわざわざ作っている。

時代が変わって生活のスタイルは変わってきていると思うんですけど、自分をきちんと持っていないと、男性ばかりの中で生活することって非常に難しい。いい意味でも悪い意味でも男性を利用する女性もいますしね。だけど、そうじゃない人たちもいますし、どちらにしても、非常にその女性の強さというのを感じることはありますよね。

もっともっと寿の男性たちが元気な時っていうのは、女性が簡易宿泊所で生活するということは注目されるから、そこで男性同士のトラブルになる。女性を自分のものにしたという欲求が出てきたりするんで、それで女性はお断りよということがあるんですけども。今は高齢化してますし。私が関わっている女性が簡易宿泊所でひとり住んでいます。彼女はもう 77 歳です。だけど、常に自分は女性である、周りは男性であるという、その緊張感は持ったまま生活しています。

女性ってしたたかだなと思う時もよくある。私はそんなに、人と深く関わったりとかするのが苦手な人で、それぞれの過去を根掘り葉掘りすることは全くないんです。関心もないんで。ただ、見ていると、男は愚かで女はしたたかだなんて。比較の問題、たぶ

ん男性の愚かさがかかなり大きいから、でも優しいですよ、男性は。〔男性は〕幼稚。

確かに寿の中では女性は少数かもしれないけれども、じゃあ寿に来る前のところは、いくら周りに女性がいて、自分が女性という少数じゃなくても、やっぱり寿で生活をせざるを得なくなった女性たちというのは、女性だとか男性だとかではなくて、寿に来る前にすでにそういう意味では少数派に属しているんだと思うんです。様々な課題を背負っている、荷物を背負っているわけだから、いわゆる性別とか何かを超えたものを、彼女たちはすでに寿に来る前に背負い込んでいる。だからここで、寿の中でしか生活せざるを得なくなって来ている。そこで、じゃあ自分が女性であること、少数派であることは関係ないこと。彼女はたぶんもうそれは乗り越えている。もしかして、どん底までね、行ったかもしれないのね。女性たちは外の世界で。だから、性別による少数派マイノリティは、すでに寿に来る前に彼女たちは乗り越えてる。

Sさん自身も人間関係の距離を保っているので、簡易宿泊所でひとりで暮す女性たちの個人的事情は知らないという。しかしそれでも、彼女たちの置かれた状況の難しさ、それを生きている女性たちの強さを感じる。最近では女性専用フロアを設ける簡易宿泊所が現れているが、一般にお手洗いが共同で男女が分かれていない。このことに象徴されるように、女性たちにはたくさんの男性に囲まれて生活する緊張感がある。さらに彼女たちは「寿の中でしか生活せざるを得なくなって」その過程で「どん底までね、行ったかもしれない」。寿に来る前に、多数派の中の少数派、さらに自分の社会環境から排除されるという状況をすでに別の局面で経験しているので、性別によってマイノリティになるという課題は乗り越えているのではないかと推測する。だからこそ自立しているのであり、Sさんはこのような意味で、寿の女性は非常に強いという。

2-1-3 社会的排除と距離感

寿のひとり暮らしという帰結は本人の問題によるものではなく、もともとの社会環境が、受け入れることが出来なくなって排除された結果だという。

《S》寿以外のところで受け入れてくれないわけじゃないですか。それはアルコール依存だったり、もちろん高齢だったり障がいだったり、自分がそれまで住んでいたところで受け入れてくれない。そこに住んでいけることが一番いいんだけど、決して本人だけの要素ではないですから。地域そのものが非常に地域力がなくなってきている中で、自分たちにとって背負いきれない人が存在すると、それは地域からの排除っていうことになる。ホームレスの人たちだってそうですよね、実際。

寿に以外に住む場所のない本人の問題なのではなく、依存症、高齢者、障がい者などを受

け入れることのできなくなった、「地域力」の失われてきた日本社会の問題だという。

寿地区には社会的に排除された人々が高い人口密度で生活している。面積は 0.06 km²、2016 年の簡易宿泊所宿泊者数 5,841 人、単純にこれを人口密度に直すと 97,367 人/km²である（横浜市健康福祉局生活福祉部生活支援課寿地区対策担当 2017: 13）。

《S》この狭いところでこれだけの人たちが生活していて大きなトラブル、事件が毎日起きていくわけじゃないってことを考えると、私も小さいですけど職場という単位で見ると、〔寿では〕お互いに相手との付き合い方が非常に距離感をきちんと保つんです。自分も傷ついたり様々な過去に触れられたくないものを持っている人たちは、相手に対しても絶対踏み込んだりしないっていう付き合い方をする。たとえば簡易宿泊所って 3 畳だから、ドアが隣同士だったら比較的〔近い〕。そこで、ひとりでお部屋で亡くなる人も当然いるんだけれども、1 週間も 2 週間も放置された状態っていうのはないんですよ。隣同士が別に挨拶を交わすわけじゃないんだけれども、隣のドアの開け閉めがここのところ聞こえないねって管理人さんに言って、鍵を開けてもらったり。大きな貧富の格差っていうのがないですよ。住まいは 3 畳の簡易宿泊所だし、家族はいないしひとりだしそれは男性だろうと女性だろうと。そうするとどこかで同じ隣同士というものを、息づかいや何かっていうことはね、直接聞こえなくてもそういうことを、お互い気にしながら生活しているのかなぁということによく感じるんです。ある種の寿一家的などころはあるかもしれない。長屋的な。

寿に生活している人たちは「相手に対して絶対踏み込んだりしない」「別に挨拶を交わすわけじゃない」という距離感を保ちながら、「お互い気にしながら」「寿一家的」「長屋的な」隣同士のつながりがあるという。また、S さんは、「私も小さいですけど職場という単位で見ると、〔寿では〕お互いに相手との付き合い方が非常に距離感をきちんと保つんです」と表現しており、自分自身も寿に生きる人として、人間関係の距離感を保っていることが分かる。

2-1-4 外から来る人たちと寿の人

外から寿に人呼び、寿を知ってもらおうきっかけとしてアーティストが入ってくるのは、手段としては良いという。

《S》〔寿が文化的にいろいろな企画で魅力的に変わってくるというようなことは〕、たとえばホステル・ヴィレッジ⁽⁷⁾ があるじゃないですか。あそこをやってる岡部くんなんかがいちばん最初だったと思う。アーティストが入ってきたり、それまでになかった文化が、もうすでにいっぱい入り始めている。これから広がるかどうかっていうのはまだ

未知数ではあるんだけど。寿っていうと日本人は拒絶して入ってこないじゃないですか。その寿を知ってもらうために様々なイベントをやったり、アーティストが入ってきて何かをやったりパフォーマンスをしたりっていうのは、寿に足を踏み入れてもらうひとつの手段としては、手法としては使える

私もそういう意味では、気持ちが変わってくるんですよ。最初大勢の人たちがボランティアっていうことで地域見学をしますよね。10人でも20人でもグルグルと。私も作業所で職員をやっている時に、そこで学生を受け入れて地域見学をするんですけども、その時に必ず言うのが、「あなたたちの存在、地域を見学するあなたたちの存在がこの地域をさらなる偏見に導いているかもしれないんだよ。寿っていうのは、ここで生活をしている人たち、私も含めて生活の場だから、そこに365日、常に見学者が町を観に来ているということ自体はあり得ないこと、住宅展示場じゃあるまいし」という表現の仕方をする。でもそういう人たちを町の人たちは誰ひとり、何してんだよなんて言わないで受け入れてくれます。だから、寿の人たちが最大のボランティアではないだろうか、と。ボランティアって何なのよということも考えました。

「寿の人たちが最大のボランティア」という表現は、何を意味しているのだろうか。ボランティアは、誰かが誰かに無償で自発的に労力などを提供することだとすれば、寿の人たちは外の人たちにどのような労力を提供しているのだろうか。この文脈では、寿の外の人が「寿を知るため」に寿の人が払う労力である。何を知るのだろうか。これまでの語りを振り返れば、「寿のひとり暮らしという帰結は本人の問題によるものではなく、もともとの社会環境が、受け入れることが出来なくなって排除された結果だ」ということ、あるいは、寿の人々が「自分の社会環境から排除されるという状況」を乗り越えてきた「強さ」をもった人たちだということを知る、などということがいえるだろう。日本社会の問題や寿の魅力、これらを知ることである。「寿の人たちが最大のボランティア」という表現によって、これらを知ることは、外から来た人たちにとって益があるということである。

ただ、もう一つの解釈もある。次にSさんが語るように、ボランティアの学生たちが帰るとき、受け入れ先は「本当に感謝をして来てくれてありがとうっていうふうに締めくくってくれる」、そこから受ける満足感も外から来た人々は味わうことができる。そういう意味で、「寿の人々が最大のボランティア」だともいえる。二重の意味がある。

《S》最初は、常に人が見学に来る町というのはどうなんだろうと思ったんだけど、今は寿を見てほしい、大勢の人たちに寿を知ってほしい。自分たちの目で、外からの噂とかじゃなくて、本当に自分の目で寿を見て感じてほしい。その結果それが、ああ、噂通りよねと思ってそれは仕方がない。だけど噂とは違うじゃないと思うかもしれない。とにかく自分の目で、自分の肌で、自分の匂いで寿を感じてほしいと、今はそんな風に

変わった。なかなか来てねと言ったって来るわけじゃないので、そのためにひとつアートもありだし、いろんな入り口、寿に入りやすくするための仕掛けっていうのをいくつかも作っていく必要性はあるだろうと〔思う〕。

〔ボランティアなどで来る学生は〕満足してますね。もちろんボランティアじゃなくても、学校の授業の一環で来る学生たちだって、それはある種自分の意志じゃない。だけど、〔学生たちを〕受け入れてくれるところっていうのが、学生たちが帰る時に本当に感謝をして、来てくれてありがとうっていうふうに締めくくってくれるんですよ、優しい人たちで。でもそれは嘘ではないと思うの。普段、皆高齢が多いから、若い人たちと接する時間がないわけですよ。そういう時に学生のような若い人たちが来る。自分と話をしてくれなくても、学生同士が話をしている、楽しそうに会話をしている、その表情、声を聞くだけでもひとり暮らしの高齢者にとっては、ものすごい普段と違う場面だから。

その他に、多くのボランティアを受け入れているのは、毎週金曜日昼「炊き出しの会」による寿公園の炊き出しである。大学のゼミ、社会福祉の学生などがボランティアとしてくる。かつてはホームレスで炊き出しに並んでいた人も、町の住民も参加して炊き出しを行っている。

Sさんは、寿の住民や寿福祉センター保育所の子どもたちが参加した例として、寿オルタナティブ・ネットワークのアート・イベントについても語ってくれた⁽⁸⁾。

《S》アートといえば、そうだそうだ、こんなことも寿でやっていたんです。〔Sさんが写真を出してきて、みんなで見る〕これは、プラレールを広場に並べて、保育園の子どもたちとやった。これはシャボン玉。オルタナティブ・ネットワークって言うんですけども、アートも基本はアーティストが来て自分で勝手にやってくるんじゃないくて、子どもだけじゃなくて、町の人たちと一緒にって作品を作って。これは小さくて見えないんだけど、これ、これ。赤い人形が壁一面に貼っているんですけども、実はこれの色塗りをやったのがうちの作業所の人たち。これでね600枚ぐらい、約600枚ぐらい、ここの壁に全部〔に貼ったんです〕。やっぱり職人だから、「これ1回じゃダメだよ、2度塗りしなきゃ」とか。これはほら寄せ場っていうか、あの労働センター。無料の労働センターの広場。そこの壁に全部貼ったんです。

寿の中からは〔外から来るアーティストに対する疑問は〕出ないんですよ。こういうことをやっているって発表した時に言われましたね、外の人から。寿の中で言われるんじゃないくて、寿の外で、それは寿にとって何なんだってことを言われたりね。

このように、「ことぶき福祉作業所」の人たちが積極的に製作に参加したアート・プロジェ

クトがあり、アートは外から人を呼んでくる仕掛け以外の、寿の人々にとっての意味も持っている。寿の中の人からは、このプロジェクトの意義についての疑問は出なかったとSさんはいう。しかし、外からは出された。ただ、アートが、寿になにか変化をもたらしているかという点、「今のところね、そんなに大規模にやるわけでもないから。ただ、やっぱりそれがひとつの楽しみになっている人たちはいる」という評価で、アート活動は寿の大きな変化には結びついていないのだろう。

Sさんは、寿にも文化がある、文化的なものはないと思うかもしれないけれど、「素晴らしいもの」があるという。

《S》〔1970年代から、文化的なものが寿に〕あったんです。子どもがたくさんいるじゃないですか。子どもたちはやっぱり差別されるわけ、学校に行って。当時私はいないから、これは聞いた話ですけども。その子どもたちが寿の子どもっていうことで胸を張って生きていけるようなひとつの方法として、町の大人たちが考えてくれたのが、今で言う国際仮装行列。国際仮装行列ってのが横浜で5月の3日にあるんですよ。そこに、丁度仮装をやり始めた頃。山下公園から伊勢佐木町をずーっと通って回るコースです。寿の子どもたちが鼓笛隊として同じユニフォームで参加したんです。もちろん大人も〔参加〕です。

盆踊りの時に、寿音頭というのがあるんですけども、それは寿の子どもたちが吹き込んで。それは何十年も前の話、私が来る前だから40年以上も前の話だけでも、それはすごいなと思った。

こういう地域を外から見ると文化的な要素は何もないじゃないかと思うかもしれないけれども、それはそれは実はそんな素晴らしいものがある。今でもそれは踊ってますよ、盆踊りで。

2-1-5 「完璧な母」

日本における男女関係がどのように変わってきたと感ずるかという、大きな質問をぶつけてみた。「難しいね、難しいね」といいながら答えてくださった。さらに、Sさん自身がなぜそのように自立した生き方ができるのか、その背景も伺った。

《S》私個人で言えば、わがままだから、自分の思い通りに生きてきた人だから、私は変わってない。あんまり男性だとか女性だとかっていう縛り、男性だとか女性だとかのない状況でずっと生活してきたし、生きてきた。周りもあんまり自分の性別っていうこと〔を考えていない〕。たぶん子どもの頃が一番意識しました。女性で生まれてくるのは二度といやだと思った。

〔母は〕反面教師かもしれない。母はとっても強い人で、今も元気ですけど、91歳

ですが、世の中で逆らえないいちばんです。〔母は〕家庭〔にいました〕。完璧な母でした。完璧な母です。〔きょうだい〕4人。だけどその完璧な母を見て、高校生ぐらいの時に、私は18までうちにいた、母は何のために生きているの、誰のためって。子どもとか夫、子どもが大きくなったら、父親のため、何のためって、疑問を持つわけですよ。私はそういう母を見て、ああ、私は一生結婚するのはやめよう。私の生き方じゃないわと思った。完璧なのね。隙がないの。よくいっぺんも暴力を起こさないで成長したなど、自分で思う。

「反面教師」としての「完璧な母」に反発して、結婚はしないと思いながら、Sさんは「結婚」をする。そして、母と娘の強い絆がある。

《S》それは人を好きになるということ。ただ私は、入籍とかそういうことはしていないわけ。実は一緒にも住んでいない。〔子どもの〕出生届も自分では出した。うちの息子がね、よく事実婚の記事が出るじゃないですか。そういう時うちのお母さん、昔っからやっているのねって。

今は専業主婦が希望の女性たちが多い。前は違ったと思いますよね。私は1970年代だからね。でも私はそんなに確たる〔考えがあったわけではないけれど〕、苗字が変わることが、結婚して苗字が変わることがどうしても受け入れられなかったの。うちは親も、結婚しても同じ苗字だから、S同士だから。旧姓何とかとかっていう会話が日常ない。結婚すると男性は、自分の苗字を名乗るのが当たり前だと思っちゃってるじゃない。えっと思って。考えられない。私の名前は、Sの苗字で眞理子って親がつけたんだから苗字が変わるってことが〔嫌だった〕。彼はね、うちの苗字を名乗るって言ったの。でもそうすると、弟と同姓同名になるから、だからダメよって言って。私の親はこういう私を、20歳になるかならないかだから、お前と話をしてもダメだって。結婚するってどういうことか分かっているのかと、さんざん父親に訊かれて、でも一緒に住むことと言ったんだけど、そうしたら話にならんって言って、向こうの両親と話をしますと言われて。ずーっとそんな感じで来てるのよね。

でも後で思うとね、母ってすごく幸せな人だったと思うのよ、ただ自分の年齢が18歳ぐらいだと、親に対して非常に厳しい見方をする年齢ってあるじゃない。それがそうだったの。たまたま母は更年期障害とぶつかってるし。

母は私から見たら完璧に見えたけど、実はそうじゃないんだっていうことを、後でいろいろ分かってくる。それが逆に私にとっては救われた。完璧じゃない母がいたんだということで、私は救われた。それは大人になってですよ。親と子という関係から、ひとりの女性同士としての関係が作られてくる時になってくると、それぞれ見方が変わってくる。1年間文通していたんですよ。はたちぐらいの時かな。もう18で岩手を出て

きましたから。そんなに電話だって頻繁にかけられないから文通してました、母とは。その期間があって女同士、親子じゃなく、ひとりの人間と人間との付き合い方だっていうのがそこからできてくる。〔お互いに手紙のやり取りをして〕変わりましたね。1年で100通。〔3日に1回〕そうなりますね。いかに私が暇だったかですね。母が言っていましたよ、100通ぐらいあったもんねって。私は100通ぐらい書いたんですけど、母は3回に1ぺんぐらい返したみたいですね。私はそんなに友だちが簡単には作れなかったから、たぶん母しかいなかったんでしょうね、当時はね。あれだけ反面教師だった母にね。私にとってはその時代っていうのがあったから、母との関係とか、心の中に重くのしかかっていた母という存在が変わってくるきっかけではあったですね。

一般の社会では、Sさんは女性は差別されていると感じているが、寿ではそうではないという。

《S》寿の女性たちが、一般社会のように男性より低く見られているかっていうと、決してそうじゃない。それは対等だと、寿の女性たちは。むしろ女性は優しくされてるかもしれない。

Sさんは、「日本社会では法的に規制しなければ男女が平等な権利を守られない状態であるから、女性は差別されているといえる」という。しかし、寿では女性は差別されていると感じてはいない。

2-1-6 人としての最後のプライド

《S》私は、寿の人を見て思うのは、何も持たない、逆に言ったら失うものが何もない、だけど人としての最後のプライドだけは持っているよという、この強さ。それを見た時に、彼らは真の意味での精神的な自立をしている人たちだと思った。確かに経済的には生活保護だったりするけれども、本当の意味で精神的な自立のある人たちが多い町と、私は思います。

真の意味で解放されている人たちだと思いますよ。マジョリティとくらべると規制がない。自分たちで規制しようと思わないでしょ。だから、マイノリティの人たちこそいちばんプライドを持って、本当の意味で解放されている。だから魅力があるわけ。

Sさんは、寿の人々を、「人としての最後のプライド」を持ち、「精神的に自立」し、「規制」がなく「解放」されている、「だから魅力がある」、このような人々だと言う。Sさんは、社会問題が累積した地区と認識されている寿を、まったくネガとポジを反転させて、積極的

に評価するのだ。外からきたインタビュアーである私たちに寿をこのようなものとして認識して欲しい、そういう希望もあるかもしれない。しかし、そうした誇張をを差し引いても、それは彼女の信念のように感じられた。

2-2 M 妃佐子さんインタビュー

M 妃佐子さんは、日本基督教団の牧師で神奈川教区寿地区センターの主事を務めている。1955 年生まれ、聞き取りの時点で 59 歳。2014 年 2 月 26 日 16 時から 18 時寿地区センターの一角でインタビューに応じてくださった。紹介者の「鹿児島さんが一生懸命アレンジしたので引き受けてくださったのだが、当初あまり話すことはないとおっしゃって、なかなかレコーダーのスイッチを入れられなかった。「他の人が聞いてそれがどうなんだというか、自分がここに来てどうするというか、さっき言った『女性』と言われるとそんな、女性として来たわけでもないし」⁽⁹⁾ という。

M さんは、神学生だった 1981 年から 5 年間山谷に通い、さらにその後は引き続き寿という寄せ場で牧師として働く。当時、女性は少なかったという。

《M》山谷で周りの人たちが、まだ若かったということもあってこんなところに来るんじゃないよとか言われて、ああ女性って、自分はそういうふうに見られているんだなあという体験はあるんですけど。

5 年間、学生の時、山谷に行って、女性って周りからは言われますよね。男性が多いですから。1986 年に寿には来たんですけども、まだほんとうに女性は少なかったんですよね。活動する女性は少なかった。共同保育の女性たちと、あと S 眞理子さんとか、そこに私が入ってきた。

このように当時は、女性が少なくて周囲から「女性」として意識されていることを感じていた。

2-2-1 ネパールへ

青森の高校生時代、ネパールで活動する岩村昇医師の本と出会った。岩村医師は 1962 年に日本キリスト教海外医療協力会の派遣ワーカーとしてネパールに渡り、18 年間ネパールで医療に従事した。日本キリスト教海外医療協力会は、古切手運動による発展途上国への医療支援を初めて行ったことでも知られている。

《M》高校生の時、私は青森県八戸市の出身で田舎なので、ベトナム戦争の頃、都会で学生たちが反対運動をしているのはラジオのニュースで [知って]。ベトナムの戦争の武器を日本から戦車が送られるというのを止めてるというニュースも流れていた。そう

いう日本、自分が日本人であるということが、とても悲しかった。同時に、韓国に日本人がしたことを聞かされて、自分が日本人としてすごく嫌だった。嫌だといっても自分は日本人でアジアに償いたいという思いがあって。そういう思いを持っている時に、ネパールのキリスト教の海外医療チームに携わっている岩村ドクターと知り合ったんです。

子どもたちの結核予防のために古切手を集めてという運動があるんですが、その始まりを作った方です。

その頃のネパールっていうのはすごい貧しい、今も貧しいんですけども、すごく貧しい中で、子どもたちが行き場所がなくて、その子たちのためにホームを作ろうと、ご自分〔岩村昇医師〕もそのネパールの子どもたちを育てて一緒に生活していた。〔岩村昇先生の作った〕その「お母ちゃんホーム」というホームで私は働きたいと思ったんです。

高校生のときにそう思って、Mさんは短大保育科に進学する。これは、アジアに対する償いの気持ち、また具体的にはネパールの子どもたちのために働きたいという希望によるものであった。すぐにネパールに渡りたいという希望を持ちながらも迷いもあり、短大卒業後は青森で幼稚園教諭として勤務し、25歳のときにやっと決心し、仕事を辞めてネパールに行った。

〔M〕25歳の時に〔岩村昇先生に〕手紙を出したら、とにかくこういう団体があるから行ってきなさい、ネパールに行ってくださいということを岩村先生に言われて、アジア国際夏期学校〔に入った〕。

〔アジア国際夏期学校は〕牧師たちがやっているグループで、入学はあるけど卒業はない、百年かけて日本からアジアに日本の青年たちを送って、本当にアジアが抱えている問題とか日本の問題とかをきちんと見ていこうということで始まった。アジアを踏み台にしてきた日本、それを変えていこう、アジアと日本の関係を考えていこう、と。それで、1ヶ月だけなんですけど、ネパールへ行きました。

念願のネパール行きを実現し、岩村昇先生のもとに行った。ところが、岩村先生の作った「お母ちゃんホーム」はもうなかった。その子どもたちはすでに成長し、ネパールで草の根としての働きをしていた。岩村昇先生から、Mさんはネパール人の牧師を紹介される。

〔M〕ネパールの牧師さんを紹介されて、ずーっと一緒に1ヶ月間行動しました。岩村さんから紹介されたNさんという方と。そこでキリスト教が貧しい人たちの中で、国教というとヒンズー教なので、キリスト教を信じていると言うと迫害に遭う時期に、キリスト教の人たちが集会を持っているというところでの出会いとかがあったんです。

私は子どもの教育っていうことで行ったんだけど、自分がネパールの子供たちに教えることは何もないということに気がついた。いちばん怖いのは日本だというか、アジアを侵略している、経済侵略。自分の中では、アジアで働くということとはなくなって、日本で侵略に対して反対していかなきゃならない〔と思うようになった〕。日本の中で踏み台にされている地域があるということも知って。

信仰のために迫害されている人々との出会いがあり、突き動かされるものがあったが、日本が自分の働く場所だと気が付いたのである。

2-2-3 山谷へ

1ヶ月のネパール滞在で、むしろ貧しい人々を犠牲にしている日本社会の問題、具体的には、日雇い労働者の問題などに取り組みたいと考えるようになった。

《M》高度経済成長、私はもろにその中で生きてきたんです。私はすごい金持ちとかじゃなくて、普通なんだけど、日雇い労働者の人たち、アジアの人たち〔の〕犠牲に成り立っている。踏み台というか、その犠牲に自分の生活が成り立っているということも、すごいショックだった。じゃあ自分がどこで生きていくんだ、と言った時に、私は東京に帰ってきて神学校に入ろうと思って、〔東京の〕農村伝道神学校というセミナー、農業のこととかいろいろなことを学びながらという学校でもあったので、そこに入りました。

農村伝道神学校に5年間学び、その間、日曜ごとに山谷の浅草北部教会に通って、戸村政博牧師と一緒に炊き出しなどを行った。

《M》戸村政博っていう牧師は、もう本当に地域の中で〔働いていた〕。5年間〔一緒に働いたん〕ですけど、将来的にそういう所で活動というか、生きていきたいという時に、たまたま寿で働いていた前任者が辞めるという話があって声を掛けられて寿に来ました。それが寿に来るいきさつというか。

2-2-4 寿の人々の元へ

Mさんは神学生の5年間、山谷の浅草北部教会で戸村牧師と活動を共にし、自分もこのような生き方をしたいと思うようになった。1986年神学校卒業の時、当時、日本基督教団神奈川教区から「ことぶき福祉作業所」に派遣されていた野々村耀牧師が辞めるというので、その後任として神奈川教区から派遣されて寿に来た。前任者の野々村牧師は「ことぶき福祉作業所」の職員として活動していたが、神奈川教区の寿地区活動委員会が寿のなかに拠点が必要だということから寿地区センターを作った⁽¹⁰⁾。

《M》 神奈川教区の中に、たとえば性差別問題を考える会とかいろんなグループがある、基地の問題を考えるグループとか、多民族共生のグループとか、その中に社会福祉の委員会があって、寿の問題を考えるグループがあったんです。その社会福祉小委員会の中に、野々村さんという人が〔いて〕、派遣されて〔ことぶき〕福祉作業所で3年間勤めたんですが辞めることになって、そのあと教区としてじゃあどうしようかっていう時に、やめるわけにはいかない、寿の活動をどうしていこうかということが話し合われたんです。

福祉作業所で昼食を一緒にしたいっていう野々村さんの要望で、教会の方々がボランティアとして参加し始めたんです。野々村さんは辞めた、けどボランティアの人たちはいる、で、私がいる。一応来たという形で、じゃあどうやっていこうかというのはみんなて話し合いました。これからどういうふうにしていこうかということ話をしました。福祉作業所だけじゃなくて、寿の中でどういう活動をしていこうかと。そのために、もとにかく拠点が必要だということで、ビルの一室を借りました。お金は神奈川教区の中に予算化されているんじゃないで、全部献金でやっています。ただ、その時はちょっと活動のためのお金が残っていたので、それでお部屋を借りました。

私たちはキリスト教を伝道するために入っているのではないということは、みんなの一致点というか、前提。私たちは寿の中で今必要とされているものを地域の人たちから学ぼうということで、いろんな方たちから学ぶ学習会を始めました。

Mさんにとって、地域の中で必要とされていることを地域の人々から学び、それに基づいて働くという姿勢が、たいへん重要である。宣教するという立場を取らない。Mさんのインタビューに一貫して響いている通低音である。

1980年代、寿の社会運動は活発だった。1975年から5年間の寿生活館自主管理闘争を経て1981年に寿生活館が業務を再開する。1979年から寿夏祭りの期間中に寿地区の中心の職安前広場で「フリーコンサート」が開催されるようになるが、1980年代には外部から多くの若者を集める自由な祝祭の場に発展した。さらに、この時期は、1970年代に生まれた社会運動が組織化され「ことぶき福祉作業所」開所、「寿学童保育」開始、日本キリスト教団神奈川教区「寿地区センター」開設、「ろばの家」「カラバオの会」の活動開始と、寿地区で社会的活動をおこなう団体が次々と設立された。

寿地区センターは神奈川教区の中に予算があるわけではなく、献金で賄われている。現在もそれは変わらない。

《M》 寿で何が今必要か、寿の現状を学ぶ〔勉強会を始めました〕。子どものことをやっているグループがあって、老人のグループがあって、身体障がい者のグループもあって、アルコール依存症のデイケアのグループは今出来つつあります。その中で精神障がい者

の方たちの行き場所が全くないと言われて。そういうことをやってみないか、みんなでやろうよということで、〔生活館の〕2階に横浜市の相談機関があったんです。そのワーカーとか、その頃は保健所もあったので、保健師さんとか、地域の人とか、お医者さん、精神科の医者とかを呼んで、ボランティアの人とか、寿地区活動委員の人とか、私とかがいて学習会をする。私たちが勉強する〔会を始めました〕。

勉強会の中から精神障がいの人たちのためのデイケアを行うこととなった。

《M》この寿地区センターでデイケアを週3日やり始めました。一緒に食事を作って、ひたすらトランプをしたり、どこかに遊びに行ったり。あの頃やっていたのは、プリン石鹸とかですね、みんなで作っていました。廃油を使った石鹸です。食事を一緒に作ったり、散歩に行ったり。〔利用者の〕紹介は、その頃は保健所の紹介でってこともあったんですけども、今はもうその社会福祉保健センター、中区の社会福祉保健センターが窓口になるということで〔利用者〕を紹介してくれる。その頃は生活館の横浜市の職員とか、こういう人がいるよとか、ということで紹介されて、人数は4、5人だったんですけども始めました。

その精神障がいを持っている人たちはやっぱり、週に3日とかじゃなくて毎日やる必要があるね、生活のリズムとか、もっときちんとケアしていこうということで、キリスト教の団体っていうんじゃなくて、市民の会を作ろうということで「ろばの会」という会を〔作りました〕。

ここでつくられた「ろばの会」はやがて1988年には精神障がい者地域作業所「ろばの家」の開所につながってゆく。

《M》「ろばの家」はパンを作ったり、クッキーを作ったり、花ダワシ作ったり、プリン石鹸作ったり。NPO法人にいまはなっています。その頃横浜市っていうのはね、任意団体にちゃんと補助金を出していたんですよ。すごいですよね。ただ、それでは十分じゃないので、給料も安いし、というので、皆で自分たちの給料を出すためにバザーをしたりっていう時代もあったんですけども。それでもまあ皆で運動して勝ち取っていったっていうか。

「ろばの会」「ろばの家」の命名の由来について伺った。

ロバは、キリスト教の聖書の中のロバが、エルサレム入城でイエスをロバに乗せていくという。エルサレムに入城する時にロバにという、聖書の中から取りました。そうい

うふうに〔ロバのように軽蔑的に〕見られている、嫌われている立場にいる人たちなんだけど、すごい大事だよってということで、ロバっていうのはとても大事な役割を果たしたという。

会の名前にロバを使ったのは、新約聖書マタイによる福音書第21章イエスがエルサレム入城に際してロバに乗ったというエピソードに拠っている。ロバのように「嫌われている立場」のものが実はとても「大事な役割」を担っているという意味だという。Mさんの寿の人々に対する一貫した姿勢である。

バブル経済が崩壊し、1990年代に入ると横浜にも野宿者が増えた。1993年に「炊き出しを考える会」による炊き出しが始まる。また野宿者を訪問する「夜回り」「パトロール」も行う。

《M》〔「ろばの会」が軌道に乗ると〕そのあとはもうひたすら寿の中の活動ということで、炊き出しや夜回りをやったり。野宿している人たちがどんどん増えている時にやっぱり必要だよねと言って、寿地区センターと、日雇労働者組合と、老人クラブの三者で〔炊き出しを〕やり出しました。最初は「炊き出しを考える会」とかそんな名前だったんですけども、そういうもんじゃないよね、みたいな感じで、「考える」を取り「炊き出しの会」と名前を変えて。

寿地区はもともと日雇労働者の町で1990年までは、簡易宿泊所宿泊者の高齢化率は7.7%であり、横浜市8.6%、全国12.0%よりも低かった。それが1995年頃から簡易宿泊所宿泊者の高齢化率は17.6%と顕著に高齢化が進み、現在は56.5%に達している（横浜市健康福祉局生活福祉部生活支援課寿地区対策担当2017）。このような状況を受けて、高齢者の問題にも取り組み始める。

現在は、寿地区の中にデイサービスなどの高齢者向けの介護サービス事業がたくさんある。しかし、そういうものがまったくなかった1990年代後半から、寿の支援活動を行っている人々とともに高齢者ふれあいホーム「木楽な家」の活動を始めた。「木楽な家」は、無機的な建物の多い寿地区のなかで、温かみのある文字で正面に「木楽な家」と書かれている。「ちっちゃい、可愛い」建物で、3階建てである。「できたのは10数年前なんですけれども、その頃は今のようにデイサービス」はあまり多くなかった。「高齢者のデイサービスって今すごく多いんですよ。〔当時は〕そういうのがなかった時代です」「私がやっているのは何もないんです。あとで話をするんですが、みんなで一緒にやっている」。寿で活動する団体はいくつもあるが、小さな場所であることから運営は同じような顔ぶれである。Mさんのほかに、S眞理子さん、日雇労働者組合や行政からも人が来ている。1998年からは通ってくる利用者のために昼食会も始めた。「高齢者が寿の中にどんどん増えてきて、下駄履き

でそのまま行ける場所に自分たちが溜まれるたまり場が欲しいということで、そこで昼食会をやっているんです」

初めて寿に来たときに寿をどのように思ったか、「汚い」などと思ったかという質問には、以下のような答えが返ってきた。

《M》私は、汚いとかも全く思わなかったし、外から怖いもなかったし。私は山谷に入った時も、自分の負い目があって。

そういう人たちを汚いと思ったり怖いと思ったりする人たちがたくさんいるわけじゃないですか。ほとんどと言ってもいい。それを変えていくために私たちがいる。どんどん外からボランティアとしても入ってきてほしいし、いろんな青年たちにも呼びかけて、寿フィールドワークをやっているんです。そういう差別〔を変えて行きたい〕変わらなきゃいけないのは、寿の外の人間のそういう差別意識。差別っていうのは頭で学問的に本を読んでも変わらない。とにかく寿に来て、自分で感じて触れ合って、寿に住んでいる人とか、野宿している人たちとも出会って、自分の差別意識と向き合っていこうということ。私たちはそういうフィールドワークをやっているんです。

私は寿がすごく居心地が良くて、私にとってはとても優しい町。皆で声かけ合ったり。まあ汚い人もいるけど、自分の中では問題じゃなかったです。

Mさんは、「寿の人たちの元に自分がいる」と表現する。関係性として「負い目」という表現も使う。それは弱い立場にいる人を犠牲にして自分の生活が成り立っているという認識だろう。だから、「怖い」とも「汚い」とも感じなかった。むしろ、寿の外に居る人たちのそういう差別意識こそが変わらなければならないという。Mさんにとっては、寿は居心地がよく優しい町だ。

寿から日雇い労働者が減少して高齢者が増加しているが、そこには日本社会の変化、排除の問題が顕在化しているという。

《M》〔寿の〕高齢者は、高齢になってから入ってきた。ここで年を取ったっていうんじゃない。外で、日本の社会で、ひとり暮らしで単身の男性にはなかなか貸さない、アパートもマンションも貸してくれない状況、家族との関係の問題、いろんな問題があるのかもしれないけれども、そういう人たちは路上に出ざるを得ない。だから、それは日本の社会の変化のいろんなことが表れちゃっているんです。住居問題とか、家族関係の問題とか。

〔寿に住んでいる人は〕生活保護が大部分なんですけど、まさか自分が来るとは思っていなかった人たちが大部分なんです。まさか自分の人生で路上に出て、寿に来るとは思わなかった人たちが大部分なので、そういう意味では本人もすごい大変、寿に来た時

の気持ちっていうか。でも、もう自分は寿しかないんだっていうところを、自分で受け止めていく時に何かしら私たちは、声をかけたり、いろんな関係を作っていくことは可能かもしれないですね。大事なことです。寿に来たっていうことで、ブライドが、人間として自分自身がやっぱりなかなか認められない。自分自身を受け入れることができない。そういう気持ちのプロセスの中で、ここででも自分は生きていくんだっていうふうに、その人たちが思えるようにどこかで関係を作っていくと。だから、楽しいこととか、何か必要だねということで映画会をやったり、そういう提供をしています。あとは、昨日「木楽な家の」みんなで一緒にイチゴ狩りに行ってきたんですけど、そういうプログラムを立てたりとか。

〔木楽な家では〕第1と第3の月曜日にサロンをやっている、カラオケをやっているんですよ。あと囲碁将棋を。毎日あそこ使えるので。囲碁将棋もやっているグループがいる。皆、だから日常的には一緒にいる人たちなんです。

外の社会から様々な状況を経て排除され、路上へ、寿へ来て生活するようになった人々は、自分自身を受け入れることが難しい。Mさんは、そういう人たちに声をかけ、関係を作り、ここでも自分は生きて行くと思えるようにしたいという。精神障がい者、野宿者、高齢者についての活動は、そのような方向を目指している。

2-2-5 寿に来る若い女性

Mさんは、最近では若い女性が少しずつ増えているという。そして、その背景として、次のような寿の中の「優しさ」と外の冷たさを語る。

《M》女性は、数的には少しずつ増えていると思うんです。それはやはり障がいを持っている人たち、精神障がいを持っている人たち、いろんな問題を抱えている人たちも多いですね。

私は何人かの若い女性と出会いましたが、生まれた時から施設で育った〔女性〕、親が育てられないということ。

〔他にも、ある女性は〕親の虐待に遭って施設に入れられ、そのあと里子に出されるんだけど、そこでも虐待に遭い、すごく傷を深く負ってる。それで、精神病院と施設を行ったり来たりしていた。結局今の日本では、そういう施設では18歳までしかいられない。日本社会ではそういう子たちがどうなるかという、たとえばひとり病院から出たあと行き場所がなくなって、最終的には寿で生活するようになる。アパートでひとりで生活できるかっていうとできない。

さっき言ったように、寿って他から見たら危険に見えるかもしれないけれども、非常に優しい。いろいろ面倒も見てくれたりということもあって、寿で生活しているんです。

あとひとり、はちになった時に銀座のアスターという有名なところ〔レストラン〕に親に呼ばれて、もうあなたは自分で生活保護を受けて生活してと、もう私は親ではない、もうあなたは生活保護を受けて生活していきなさいと言われて、精神科の病院に入っちゃって、退院したあとにもう行き場所がなくて、寿の中にある「はまかぜ」という自立支援施設⁽¹⁾に来て、そのあと寿のドヤに住み出した。〔その女性は〕もう病気で亡くなったんです。精神の病気です。薬を飲み過ぎた。

だからそういう意味では、ひとりひとり背負っている人生は違うんですけども、若い女性たちの中で、施設のあと行き場所がなくて、寿がどうこうっていうんじゃなくて、社会の制度、日本社会の制度が変わっていかないと、そういう青年たちも寿に来るだろうっていうことはありますね。

問題は寿にではなく、日本社会にある。日本社会の問題を吸収して受け止めているのが寿である。

《M》昔から寿っていうと、クスリが売られている、売買されている地域だっていうことで有名でもあるんですが、今は脱法ハーブという法に触れない、日本社会の中で、どこでも買えるようになってる。寿で依存症になった人はほとんどいない。寿の中で薬物に初めて触れたっていうんじゃなくて、この日本社会の中でアルコール依存症になったり、薬物依存症になった人たちが、行き場所がなくて寿に来る。寿の中は、高齢者や、薬物いろんな依存症を抱えている人たちが混じり合っている。〔女性たちも〕それなりにみな、ここではいろんな制度を利用して生活できている。

〔寿地区センターの〕毎月バザーでこういう衣類を100円で、全国から集まった物資を、石鹼〔などを売るので〕みんな並んで待っているんです。100円、3個で100円、目玉商品なんですけど、並んで待っていたりして。活動資金のひとつではあるんですが、地域の人たちを知る交流。物を買わなくてもずっと座ってしゃべっている人もいるし、そういう意味で交流ですね。

私たちが立っているところというのは、当事者でもないのに、この社会が変わっていかねばならないというところに立っているんで、〔青年たちを集めて寿を知る〕フィールドワークは大事にしています。

Mさんの実家は約20人の労働者を雇い塗装の会社を経営していたが、家族の中で性差別を強く感じていた。しかし、家を出てからは、寿の活動で男女の違いを感じてこなかったという。

《M》私は男きょうだいなんです、4人きょうだいで、塗装の仕事をするっていうのは、

働いている人たちに食事を支度するのは、常に女性、私が母とやらなきゃいけない、みたいな感じで。それに対してやっぱり男は、みたいな、男はなんだ、みたいな感じはあったのかもしれない。男きょうだいは自由にやりたいことをやり、私は手伝わされた。いろんな家事手伝いをさせられた。男と女、なんで女はこんな仕事を、男も一緒にやるべきだ、なんできょうだいでこんな違うのか、そういう反発心はすごい強かったんじゃないですか。

Mさんの寿での活動は、すべてが牧師としての活動なのだが、インタビューの最後に私は、Mさんは牧師としては何をしているのかという質問をしている。

《M》寿の活動をすることが牧師の仕事で、あとは学校関係で寿のことを含めての礼拝の話はよく、呼ばれたらするんです。時間があれば本当にひとりひとりとゆっくり話をしたら良いんでしょうけど、ちょっとそこまでいっていない。追われちゃってるような感じなんですよ。高齢者の人たちが自分が生きてきてよかったと最期に思えるようなつきあいをしたい、寿でいろんな経験をしたけれども、生きてきて、生まれてきてよかったと思えるような関係作りはしていかなきゃならないなと思っているんです。

インタビューの最後にMさんは、あらためて若い女性の問題を語っていた。

《M》本当に増えているんですよ、若い女性の依存症。依存症の若い女性が〔寿に〕増えている。〔でも横浜市は、若い女性は寿は〕ダメだっていうんですよ、「じゃあ、どこに行けばいいの、ちゃんと紹介してよ」と〔横浜市に〕言っても、アパートもできないとか。かといって「はまかせ」も入れないっていう女性たちもいるんですよ。すると、以前は横浜市は何をしたかっていうと、「鶴見女性相談所に行きなさい」って、突っ込む。鶴見の女性相談所を紹介するわけですよ。そこは昔の売春〔防止〕法で建てられた施設で、その法がまだ生きていて、売春じゃなくても普通のDVでもなくても、そこに行くとか社会から遮断されて、連絡はできないし、電話はできないし。全てがそうです、売春〔防止〕法に則って今でもやっているんですよ。そこに入れ、と。その人はそういうのじゃないと言っても。けっこうやりやって、私は寿町はどうかって言うんですけど。

でも最近はそのような意味では、〔女性専用の〕ワンフロアのところができてきたので〔寿に入れてくれます〕。寿以外にはなかなか行き場所がないんですよ。〔女性にとって〕寿は悪い、生活しにくい、トイレのこととかあって、そういうのはあるんだけど、かといってアパートでも暮らせるわけじゃないし。結構ボーダーの人が、寿で生活せざるを得ないんですよ。

3 まとめにかえて

S 眞理子さんと M 妃佐子さんは、お会いして受ける印象はとても違うのだが、語りを整理していて共通点が多かったので、本稿で同時に取り上げることにした。

ひとつの共通点は、社会問題が累積して問題の多い地域とされている寿を、むしろ問題があるのは社会的排除を強める日本社会であり、その問題を受けとめているのが寿だという認識である。たとえば、「地域そのものが非常に地域力がなくなってきている中で、自分たちにとって背負いきれない人が存在すると、それは地域からの排除っていうことになる」という S さんの語り。たとえば、「寿って他から見たら危険に見えるかもしれないけれども、非常に優しい。いろいろ面倒も見てくれたりということもあって、寿で生活しているんです」という M さんの語り。

もうひとつは、寿の人々への積極的な評価である。たとえば S さんの「寿の中でしか生活せざるを得なくなって来ている。そこで、じゃあ自分が女性であること、少数派であることは関係ないこと。彼女はたぶんもうそれは乗り越えている。もしかして、どん底までね、行ったかもしれないのね。女性たちは外の世界で」という語りである。また、M さんは「ろばの会」の名前を、イエスのエルサレム入城の新約聖書のエピソードからとって、「そういうふうに〔軽蔑的に〕見られている、嫌われている立場にいる人たちなんですけど、すごい大事だよってということで、ロバっていうのはとても大事な役割」を果たしていると、寿の障がいをもった人々について語る。ただ、ふたりの注目する点は、少し違う。S さんは、すでに「どん底」を乗り越えた強い人として寿の人々をえがきだす。M さんは、「まさか自分の人生で路上に出て、寿に来るとは思わなかった人たちが大部分なので、そういう意味では本人もすごい大変、寿に来た時の気持ちっていうか。でも、もう自分は寿しかないんだっていうところを、自分で受け止めていく時に何かしら私たちは、声をかけたり、いろんな関係を作っていくことは可能かもしれないんですね」と、牧師としてのお仕事をそこに見出している。

おふたりとも、寿にたいする日本社会の一般的な認識を反転させて、そして寿の人々こそ「魅力がある」(S)、寿が「優しい」(M) という。

3 つ目の共通点としては、おふたりとも寿の外から人がくることを歓迎し、S さんと M さんの間に、表現の強弱の差はあっても、外から人が来ることによって、寿への認識が改められて差別がなくなることを求めている。「今は寿を見てほしい、大勢の人たちに寿を知ってほしい。自分たちの目で、外からの噂とかじゃなくて、本当に自分の目で寿を見て感じてほしい。その結果それが、ああ、噂通りよねと思ってもそれは仕方がない。だけど噂とは違うじゃないと思うかもしれない」と、S さん。「そういう人たちを汚いと思ったり怖いと思ったりする人たちがたくさんいるわけじゃないですか。ほとんどと言ってもいい、それを変え

ていくために私たちがいる。どんどん外からボランティアとしても入ってきてほしいし、いろんな青年たちにも呼びかけて、寿フィールドワークをやっているんです。そういう差別〔を変えて行きたい〕。変わらなきゃいけないのは、寿の外の人間のそういう差別意識。差別っていうのは頭で学問的に本を読んでも変わらない。とにかく寿に来て、自分で感じて触れ合って、寿に住んでいる人とか、野宿している人たちとも出会って、自分の差別意識と向き合っていこうということ。私たちはそういうフィールドワークをやっているんです」とMさんは、語っている。

最後に、ジェンダーについては、お2人とも自分の家族との関係で「女性であること」に強い反発を感じていた。だが、寿では男である、女であるという規制を感じないでいる。非常に男性の多い男社会、女性の居心地の悪い場所というのが一般的な寄せ場の評価なのだから、この点についても一般的なものとは逆の認識をSさんもMさんも持っている。おふたりの違いは、Sさんのほうが寿の女性の「強さ」を指摘している点である。

〈注〉

- (1) G. オルポートはインタビューが個人的ドキュメントとして使えるかどうかは「語り手自身の言葉が正確かつ完全に（少なくともほぼ完全に）記録されているかどうか」（Allport 1942=2017: 148-9）だというが、今回の文字起しは友人の小野澤寿子さんに手伝って貰い、それを下敷きに私があらためて録音を聞きなおして文字起こしを行なうことで万全を期した。本稿で引用する文字起しは、文意を損なわず読みやすくするために編集を行っている。
- (2) 同時期に同じように長く寿の人々の支援を行っている原木初美さんへのインタビュー（辻山2017）も行ったが、長期間の女性の支援者はその他にひとりいるかいらないかである。
- (3) 質問は、アブデル・アムシュ（リール第一大学教授）、通訳としてマリー・メドゥヴィエル、辻山ゆき子で行った。
- (4) S 眞理子さんは、当時寿生活館嘱託職員で寿日雇労働者組合代表でもあった鹿児島正明さんが紹介して下さった。2人目の協力者のM 妃佐子さんも同様である。
- (5) 寿にある競艇場外発売場。2007年12月に開業した。
- (6) 手元には寿地区の簡易宿泊所にすむ60歳以上の高齢者調査しかないのだが、平成元年には60歳以上の男性730人、女性50人だったのが、平成12年には60歳以上の男性2,707人、女性101人、平成28年には男性3,920人、女性121人である（横浜市健康福祉局寿地区対策担当2017）。
- (7) ホステル・ヴィレッジは、寿地区の簡易宿泊所の空き部屋を若い旅行者向けのホステルに転用する事業。ホステル・ヴィレッジ林会館という名前で、一般の旅行者を海外からも受け入れている。コトラボ合同会社岡部友彦氏を中心に2004年から始められたプロジェクトである。
- (8) 2009年寿町総合労働福祉会館前の広場で、寿オルタナティブ・ネットワークによって行われたアート・イベント。2008年に〈寿オルタナティブ・ネットワーク〉が結成され、自主財源を用意し活動助成金を得て、アート・プロジェクト〈KOTOBUKIクリエイティブアクション〉が企画された。ヨコハマ経済新聞のインターネット上の記事に、プラレールやシャボン玉、人形（ひとがた）などを使った作品を見ることができる（大谷2009）。
- (9) M 妃佐子さんへの質問は、アブデル・アムシュ（リール第一大学教授）、通訳としてアリーヌ・エニンジャー（早稲田大学留学生・当時）、辻山ゆき子で行った。
- (10) 寿地区センターの歴史は、2015年に発行された『寿「なか」だより』（172号）に詳しい（三森 幸前2015）。

- (11) 「横浜市生活自立支援施設 はまかせ」は、社会福祉法人神奈川県匡済会により運営されている。路上生活者に一時的な宿泊場所を提供し、自立を支援している。

引用文献

- Allport, W. Gordon, 1942. *The Use of Personal Documents in Psychological Science*, New York: Social Science Research Council (=2017, 福岡安則訳, 『質的研究法』, 東京: 弘文堂)
- 川野英二, 2017, 「フランス社会学の〈フィールド〉との出会い」『現代思想』45(20): 79-99.
- 三森妃佐子・幸前元, 2015, 「寿地区センターの歩みと寿のいま」『ことぶき「なか」だより』(172号): 1-2 (2017年11月20日取得, <http://w01.tp1.jp/~ja66945502/news/backnumber/pdf/2015/nakadayori172-2015-12.pdf>)
- 大谷薫子, 2009, 「寿町を舞台に新たな「アートプロジェクト」〈KOTOBUKI クリエイティブアクション〉」『ヨコハマ経済新聞』2017年2月9日 (2017年11月21日取得, <https://www.hamakei.com/phone/column.php?id=185>).
- 辻山ゆき子, 2017, 「『引っ張り上げる』のではなく『今ここで幸せに』」『共立国際研究』34: 23-46.
- 横浜市健康福祉局生活福祉部生活支援課寿地区対策担当, 2017, 『寿福祉プラザ相談室: 業務の概要』横浜市健康福祉局生活福祉部生活支援課寿地区対策担当

A Reversed Outlook on the World:
A Report of a Series of Interviews with Grassroots Leaders
of a Social Movement in Kotobuki, a Japanese Skid Row

Yukiko Tsujiyama

This study is based on a series of interviews with two women who have supported the local residents of Kotobuki, a Japanese skid row in Yokohama, for thirty or forty years. I describe how they view both Kotobuki and Japanese society and try to provide some insight into the Kotobuki supporter's outlook on the world. Using an idiographic perspective, I draw attention to the unspoken context of the interviews and I try to analyze the narratives without reference to established theoretical models but by drawing attention to how these women believe situations are generated in Kotobuki.

Their narratives completely reverse widely accepted views of Kotobuki and Japanese society. In the first place, they describe the Kotobuki area as a place that absorbs and reduces the social exclusion in Japanese society, although people widely believe that in Kotobuki there are accumulated social problems. In the second place, the women believe that the residents in Kotobuki are attractive and tender hearted. They appreciate the people in Kotobuki. In addition, to discourage discrimination against Kotobuki, both of them hope that visitors will go on tours of Kotobuki and get to know it. In addition, these two women work and live in Kotobuki, a supposedly male-dominated society, but they find it comfortable and liberated. Thus, this paper describes the reversed view of the world adopted by these women in their narratives.